

巻頭言 次にすべき私たちの役目

大雪山を中心とする北海道の山岳地域で、ここ数年登山口のトイレ設置は進んだと言えます。地元の認識と行動、あわせて行政の協力がなければ改良は望まれなかったと思われ、各地の山岳会や関係諸機関諸氏のご尽力にお礼を申し上げます。

2004年まで、上川支庁クリーン大雪運動で配布されていた携帯トイレは、次年度2005年から配布されないと聞きました。配布がされない場合、回収ボックス設置箇所へ清掃回収車を派遣する予算化ができないこととなります。携帯トイレの普及に効果が見えてきた「利尻島」の良い例を手本にすると、本道で配布がなくなった地域は、回収される方法を失い、処理の難しい携帯トイレとならないか懸念されます。回収ボックスの設置箇所が登山口だから山奥への回収が難しいのであれば、回収業者の回収しやすい地点までboxを移動させるなど、回収を継続しやすい環境を整えていくことも検討に入れていただければ、今年度から各自購入した携帯トイレに変えることを勧め、継続して利用を広めることができます。

会では、年に1回「山のトイレデー」を実施しています。9月初旬のトイレデーでは、トイレマップやトイレマナーガイドを全道各地の登山口で配布しています。トイレデーの目印はブルーの幟ですが、これを持っていると多くの登山者から声をかけられトイレデーの定着してきた様子が感じられます。参加した有志の顔も綻び、山の仲間が増えるような嬉しい気持ちで実施しています。このような活動を通して、少しでも多くの方が自分の使った“トイレ紙の持ち帰り”をする事を願って実施しています。ひとりずつの行動がマナーとなって広がりをもつと、山をきれいに美しく保てるでしょう。7月も海の日を迎える頃は、山も？大変な混雑です。2003年敷設された2004年から本格稼働となった大雪山黒岳バイオトイレは大変な人気で、そのログキャビンの素敵なトイレに、1回でも入ってみたい登山者が、通常200名の予想を超え1日800名が利用しました。集中はいつでも何らかの問題を生み出しますが、このバイオトイレひとつで、表大雪全域のし尿を処理できるものではないことをご理解いただき、ザックの中には各自購入した携帯トイレを持参しましょう。勿論バイオトイレの横に携帯トイレ用ブースがあれば、藪に分け入ることなく用を足せる場所となり、植物踏みつけが防げるでしょう。

大雪山十勝連峰に美瑛富士避難小屋とキャンプ場がありますが、トイレがありません。ここを利用する殆どの登山者は、小屋の周りの草むら、沢沿いのへこみなどに隠れて用を足しています。小屋周囲の汚染状況はひどく、2004年9月5日(日)のトイレデーで、ティッシュ回収：142箇所、ウンコ回収：51盛りと多くの収穫がありました。胸をこみ上げるものを押さえながらの回収で、はじめて参加した火バサミチームは、小屋の周りで見つけるたびに奇声を発し、泣き笑いの状態で、きっといつまでも思い出に残ることでしょう。

同じ十勝の山域に十勝岳避難小屋があり、青少年の遠足登山やツアー登山、一般登山者が多く訪れます。小屋は十勝岳噴火の際の避難小屋としての機能を持っていますが、ここも山頂までの休憩地となる地点のため、登山者の用を足した跡が多く認められます。長時間かかる登山に途中1回は必ず必要となるトイレですが、小屋にトイレはありません。健全な青少年の育成を、登山によって鍛える恰好の山ですが、トイレ施設がないために身体の具合を悪くする場面も報告されています。

私たち登山者は、発展的にこれらを解決するために、登山者や山岳会と協力してバイオトイレの使い方、協力金広報の普及、トイレ紙持ち帰り、携帯トイレ購入推進など広報していく所存です。利用者が進んで解決への道を模索し、関係機関との協働を進め山岳地の美しさを保つ連携になることを願っています。

山のトイレを考える会 代表；横須賀 邦子